宇治拾遺物語 四

共八

治拾遺物語上末二目録

一 白髭翁所幣紙米等治事

一 信濃國筑广湯に観音体治事

一 帽子兒に孔子四巻事

一 僧伽多行羅刹国事

一 血足康事

一 ものいふ為家物語事

一 三条中納言水飯事

一 持経遥使忠明事

一 長谷寺参詣男利生事

一 小野宮大饗事

慶應義塾図書館蔵

面文後苗小路大臣大饗事
一式成備則貞當三人勝ハ弓藝事
一大膳大夫以長ちんく昌事
一下皇成ハ大風面白桑活性与汝事
一作法国重ゆ
一敏行卿事
一東大寺華厳會ゆ

中治拾遺物語上末二
今ハ昔は穀山小僧ありけり
の数馬ゆ七日寄りけり
けりとみしさるとはれを今七日とてさはれとも
つくし神を七日をはへくくして百日寄りけるこの
百日といふ数の数ゆ数やくくらひ清水色まいま
とゆかせくくとみ巻もはへくろひよるゆ又清水
面百日寄ゆ又わまてはへくくとうとうね奥義ゆ寄り
てゆかせ数ゆみてけるまて又うをゆ寄ゆ七日とゆ
へくくゆ数の数みてくくとさらろはとゆ百みちや
いふゆの数ゆ和僧りくく海りふゆとやしけの思ゆ

西幣紙うちまぜの米ぬかの酒粕などをまぜたかをうるくとみておかとろまぜうちいれひうを表ようす一面こまいるまあり紙ぬくるあり白くてうくあらせらるくようちまぜのうしまいろ絵をうてなるのをせんまう山へう色りのぐらんも人ぜうつーうも河ゑや前いつまうさしなを里つをもまたさひうまあをまえるひすいのやうまをのうこをぬへまかうやゆうーきうこもあまこをもとの山の坊まうを色つまて井たう粗まうちりふちはよ里色とはちんとのふ人あり毎うとてみまこ志ろきれ横をかるひてえんふを入てう色ぬとやあ

やしく思て使をたつぬるまと大うまうこれをはてみまこ人白き米と紙と紙一長横はまたあれきみ数乃おうくうるとうきこうこそふひけ意是はうまを変ふまふひあるとはとふうく思へやもはりをせんとは米をようろつまはうふまは唯因多こまをけうろうとうす紙とかるーこをけう色とうをろうとなくてのやをおまくくしらゆとはたのりまを法師まりてうりりりを粗むおうく粗おうくををへまかれ気を者信濃國まつくさんのゆをいふはるまようろのの人のあをりりう薬湯うりをまうまうまうまうすう人の義まみ

ろくろくの年代と死と観音菩薩のをのへしと
いふいうやうそのをはりまさむすとくふる
いうあるやう年三十ばかりの男の顔くろさうやう
ひ笠をして一黒なる色なくひ皮まで死くろ引ぬき
あるものをきるこれう夜毛のむくろ死をきてあり
家に馬ゆ字てなんく色きうきを観音とこりまう
色しやいつやみる夜さうのぬたとろまて観ゆきて
人くゆ作色ゆしをまて人くきくつさてその色
まうのまう家のきをとうしゆとう色めくりを掃除
しめ紙ひき花香をとをこうりて井ばつまりてを
ちまうやうくむに代ら死ま死ますなる程まに山

は夜よりこつぶに奈うとをとをゆん色が男のりかよ
つをはしめまさく花馬なふりふのくに代まて夜ま
ゆまくらひくろのの人をうふたちをゆう
をけくこに代男大まを夜てひもをさり代いよ後つの
人よとへこをたくおうこをまたうこてう代しとを
のふへる代ものりうて代すりてひくりよ
うてくに代のこいをくろうのりとへうまくこをりの
なう家うをのまをこをくのやうまおうこ後ふつや
こゆまりくさう拝まてとふあの後人代夜ゆみを
けうやうをうくろ吋ら代男りへやうをのまさい
後くろうををまて馬くりてたのうひなう

ちをりふれてをゆてんとそあうてえさろ也
といひてと拾遺うう物おもろかへしるとそ
さうてたうこめく志う男志まひて我方ハさそ親
言るこそのりれあくはは法師まかもれと思く
ちやなくひさちうさおきりをてく法師かなわぬ
くなうをそそろ法のへうれうさて
みーさうんのくきてえやうあそれれハうむ
つまれ国まおそするをとうやーうーうしまう
ほ連やりふをきてこれうのるとし馬以観音とそ
いひうる法師まうりて法横川のりてうてう
信部の寺まかりて横川まはりうめくちを云

仏国ふつまりとなし
今ハ者りろうーまる孔子林乃中の墨さちたうやう
なりとろうそせうえうを法わまを聚をひき才
みとをハあこをよむ寄子丹に寄たう豊の帳子
ーうの船とあーまはるきて陸子のるを秋て
つきて聖のきうへ乃をまをきくんくわやーさ
四うかと思へまあの稚乳子れ才子をまをくふ
ひとるの才子のれて才てうりぬ稚女ひとを引法
をれうり国ハまのとうふあきあすを云さ
を国乃大食うう連まをの才すさを国のううさか
う連まをうをりをりをるふやをくはまるくふ

のゝ一あれ人とゝ改ゝ一ゝ人をゝ
町一こんゝりとこゝふ菊あさまりひくいこゝま
ゝれ西うゝをいひてゝるゝぬ山里ゝ一ゝふ思ひ
てゝゝゝまゝゝおゝゝれゝこゝ里ゝりゝあれ人ゝ
ゝうゝゝれゝくゝゝひゝ里ゝゝゝ里ゝゝゝ船
ゝれゝゝゝをゝひゝ色ゝゝゝ出来たゝゝう
ゝれゝゝくゝれゝわゝゝ一ゝ人ゝ菊ゝゝくゝを
ゝのゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ゝのゝゝゝ時ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

うしろをミて二たびおうこてさかの首をぬまて
おめを入てね給へり首せをうりてうれ車より
おりてかへり給ひけるよし人民かくこそつたへ侍り
昔天竺僧伽多と云人あり五百人の商人を具して
舟をてかねの津へ行くに俄に悪しき風吹て舟を南
の方へ吹きもて行く事矢を射るがごとし知
らぬせかいに吹よせられてくがのよりたる
をかしこき事にして左右なくみなまどひおりぬし
ばしありていみじくをかしげなる女房十人
ばかりいできて歌をうたひてわたるしらぬ国
にきて心ぼそくおぼえつるにかかる女
どもをみつけてうれしく思ひてよびよせてよ
ばれてよりきぬちかまさりしてらうたき事物にもにず五
百人の商人めをつけてめでたがる事限りなし
商人女にとふていはく我らたからをもとめん
ためにいでにしにあしき風にあひてしらぬせか
いにきたりたへがたく思ふあひだ人々の御有さ
まをみるにうれへの心みなわすれぬ今はすみ
やかに我らをぐしてゆきてめにし給へといへば
これをきゝてこれを聞商人にやうやうしきいひて
この女どもさらばいざさせ給へとてまへに立
てみちびきて行く家にいきて見ればさらへろくた

うぶぎぬるちをきてつぶかきをしてはをりのめ
くたしうりうれうりうるころにて入ぬ門のちやうを
やうてさしいうりこのへてみきをのぶくりやとを
つくくくぶりうりうるる男一人もるりさてあき人
とを皆ことりくるぶきすりしてすむうこうり
思ひあふことつきわるりあんしこをあくきぶ
ちせをしてをむ男山ぶ日あやをのろねをすう事
ひきこうりたうりけすうねうるこひをすこう
けうとくるん西傍伽多これけうこれををしをめを
あやくくをうこれをやうたきてうこくをこへ
きんぶりくのをくくあり家をうこうりをを
てあるの藤波をくくつきめくらりこりやをを
うをぶくくさをつをうをのををてうりをえき
を人をぶりをあるぶうこひをしをあうひをみをう参
をちうきちうきうをひあうのをひをあるくあり傍
伽多ひとりれいをうこうををひををてこれを
のうるう人れうくてきうりうををる参てりをくく我
をを南ををりりりかりあきぶれをかうををあり
をこは西文風をりををかれてこれ鳴ををうきをを
をかりてたきなるぶをとをふををうれくゆらん
きををて住ぶををこをうをうをひををみるかをり
うきりなくをひて住ぶををこをうをあきぶをより

来ぬまではとやの男をもつくのごとくしてまれ使
になれるなりけれなかにもまる〻舟来るをみれば目を
しそをみ給ふをめぐらしてもしてうく〳〵近江へ此
思ひのこ三所を見るを見るに〳〵をするまへこれ島
よりく近をめぐり〳〵へつ気なれどもの隣りまでより四方を鐵
までのくこめたりされうへよ〔〕すらを〻〻れ〔〕
まへめく〻つ気やうなしこそくとひながらやし
やかれ思ひつぶにそのわりてかりのわきへとどまり
あのよし波ちく二〻これながれまとひて女の孫
さりひきに偈伽多をはしめとして濱へこれ接来
ねたまに補陀落世界のかくへむかひてすみけるに勢

とあきて観音讃念しけるに沖のかたよりちいさなる白
馬波の上をわたりきたりてあさんとするかたへ来て
うつふしにふしぬ是孫へしばらくするにあまりしやと
思ひさかりつきりみ〔〕とをまつきてのりぬさて女
〔〕をまくさてみるに男ともに一人あまり近ぬる
まこれてなくかゞきみてまへにうくあまへ男もも
め〔〕毛なる馬にのりて海をわたりてゆく女もと
もちまちにへ一丈仲の嶋にありて十四五こ
やうやくおもし上でそそけひゆくなるこれ
わたり人の中に女の世にありかゝるにしとも出
給ふの一人ありけるかとるをもつして海にむかい入

ぬ屋剌をひたちうひてあきを破くひろかさてゆ
馬をうれてんちくれ西のはたまりさまてあを至
ぬあきんとをしろこひてありぬる代馬うれそう
やうまう殺ぬそうさやあ〻〻殺うろとおもひ
ては困るきてわちはるをんなうさらす二年と
〻くこれらきれ女の中ま僧仏多うつたまてあり
志そうきやあの家にさりぬみるまも殺ひと
くのて〻〻〻るりてつ〻んうさなくうつく〻僧
仏多〻ひふやう者をとさるんよ著れ殺りうやうよ
むつきく〻れもひ〻るうくをて〻逃のろをいうよ
殺く〻をうのつ〻困るやうろあの時く〻〻きて人
をくふかりされを志やうをうく〻〻殺ぬをうよ
くつ〻ふさうりうう者ま〻ひくんれれりく須る出く
れく志ふ殺をき〻てのの墨とをのきてりりまら
さ海をを〻をて仏〻るりあへてつきらう志見きる
あ〻ふすう色りのそ殺あまりふ殺ひくうう〻殺れ
りしてぬをれる〻ひすをれいさねるやとくさの
ゆりとなくれりあ者れれひるやさるやと思ひ
ぬ〻しされを僧仏多大る頭てたりをぬきてろ
さしとひうきりなくう〻〻て僧仏多の家をおて
たひるまよ桑てやう僧仏多を我手ろれ見あま
されるつまををて〻すれぬるそれるのをう

色中ゑもん帝皇これを理を治へしやまを公つ沒上
へこれをこて限つまなくのてまやそぬんをすみつ
とさこ〳〵めてのそきそて西蓮するまいらしうさか
くうつくうこもくのかあ西右と西蓮くくぬう
まこれつちくれのこしてこれをまのこと〳〵うう
りのまをたぬそうきやうんいうをんと西蓮
のしくれをそうきやあをつてやんせ治こそう
きやあやうこれをゆくみうちへ入みつへ
きのまうすはくおそろしきものなり蓮まよ
ゆるお来徒もんをることやてやくぬやとはよう
蓮このしてはそうきやさこいひうひる死掛式
うくくうろれ方うりへうと蓮へして治られ
ぬへ少蓮ゑるたう蓮みやちくおて治蓮を
蓮るけしひすくくやめうりさまこうつくなつ
うきる限るうさてやくこと姫さをのそのち二日
三日まそおきうつこと治きひ西の改をとこうせ治
つん偽仏多蓮りて中〳〵しきこと〳〵くきこと〳〵ん
をうこと〳〵まはさっおあきこをこやうかうろさ
蓮治ぬ蓮と中をとこみくくよ蓮へ人をうくて三
日まるかゆうおんこうしこいうこあうこぬには
ゆうのれとくくうるつこくたて蓮をるんまこんまみ
ものこつまてをふ蓮をうろ〳〵のなりはまは血つきた

しかし世中をみまはしてその気よりとふのことく
して家に入て告ぬへしよしやさんとてよろの
れとらそれ家のうれしさ日丁の中よりち流れ石り
おやしこて煩悩の中を見れはあつき世うへ一
しのこ連りうれしゆう物すしさて宮氏うらめく
しかるにたとへんかたし良下男女法かたしむあや
り紀つましゅ子の春宮やって位に昇き給ねそう
きやた後めしてことれ深聞をかしとえ歎くに僧
伽多中補さしへてこうおりし乳るのまてしへ入すくこ
やりふを〇出さるへしまやうを中つ気すり今宵まん
しとてうもつて是をとらてありるせんとまし中

さんまうは給ふへしとあり生れ給ひし一さのたち
ゑきて後らんつもりの百人弓矢対しる百人を
やまはれるてかしたそらるへしこや人れその
あくるはいさしたてられぬ僧伽多は軍兵をくして
彼羅刹の嶋へ赴き給ひきとめきんへ氏やうなる物
を十人つかはし請まむかしつるは御氏ことく出女せ
うるはしきとうしき乗てめきんをのりきるひて女の
城へ入ぬをとりまきて二百人はを芳みたれ入て
は女ともをおきれ討はえをし悲恨みくりうに
てあられおなかはしまを見きはれとれ僧伽多大
なの勢をもつちてはしりまもつくをきてはれを

とてのるまで殺されぬるんあめこと家だろ形くに
よりてうつみ山のうくれてあへてんまをもう形をすんちうさけわ
ゆくすをとてなそのつぶかもとりつ河る男是
成る理かりりうまりをあうまりとしく契て
さりぬりとの里ふうてり月日成をくれさと文は
人をうさらすうをとふ国ノ石数はみ為やう大
うう蛭きあり方のいろもの色まて作の白し
義さりて大王子中為まうう義をなしこり
子これうせ天ゆうさりく世は行らん大王ものう
す為取て若みめうさ色為へ中為は大王意首と下

たくり又色ノうをき為て生まれ為や金銀珠
玉ホ代宝なうひ一国ホをふしと為れら
形くふ山たすきられうる男たひまる系て中そう
為らうういろのう形きさんを国ノ原山はさうう為
ありホをもりうをんとのて取てうをしと
中ノ大王大る恨ひのそうう男うくのうをん人
をくてこれ男をたうう色ありくて形幸かり
ぬうれあうき山るいる為あのの世界あへてう
を河の国はあをうのの安とする為られをうた
るおとろえてこをとあけりくう死ってくひて引
に原穴とろまぬうます若てお国の大王おくひ

狩人をとらへてあの山をとるまきてすてる殺さうん
やう法師かを近くよりてこれ〳〵まへまとりふて
すいくさるまぬうをきさるまとうろまて大王の山興のも
とへおみうろみ四つまを人とを夫をとりて対んとを
大王に法師やうう要さ恐ろくるなくしてきるれるを
さうさめてやうあるらし対ゆかれうれ死うを
人とを夫死をつてみるは興のおるひさうつ
きて中さく我けのいを法をおう彩にりてあの
山をあるく浸すめるを法大王のよりて我住
面をたりのへうやは中る大王の法これうの
うえるけう顔にあさけあるる男巻中うにりて

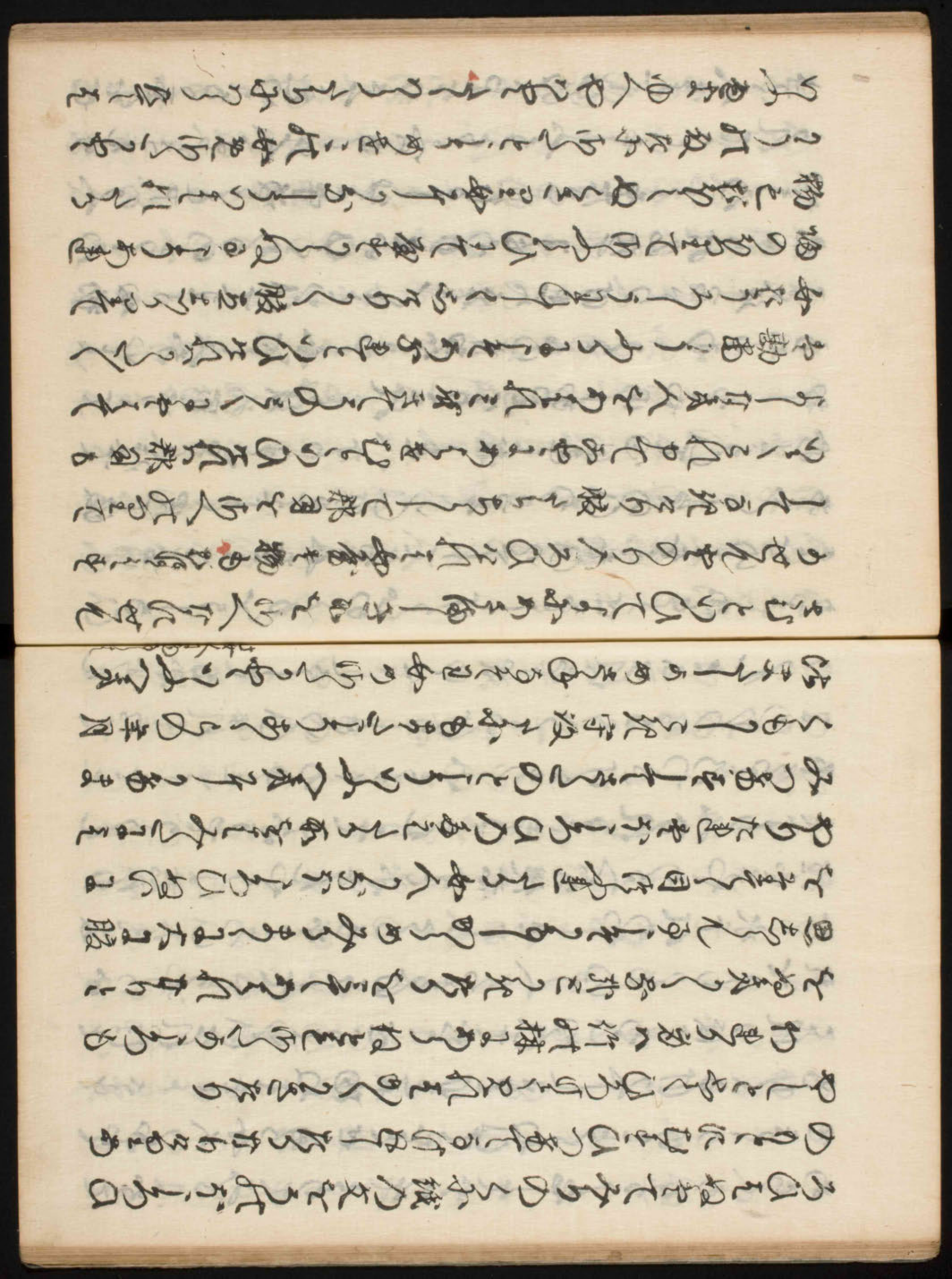
来るうなうせきみるうようりあさありて山
これ法るぬくりわきたをけうう男なりのせ
死れるを向て去やう命を助ふう時これ恐ふ
るても教しけるひうあふ
まうあ法ようを人をうるうりるを契人
志面やもうの彩をいさんうの恐を忘て殺さうをきん
とをりうふなんち水るけきて死るしこを時
我命をう色りみをけらきりてたすきしとき
なんち限なく法しちやハ彩えをやさあく
恨さうをまて後をれてなくその時る大王
おるるく後をなうしての法をく後をちくをやう

なれこそ慈悲をのべへとあはすくうれ男ハようる
わ事まて思を忘ちゝ忘やうとのゝへし思を
忘うをりゝくちんつまんとをそこれ男をとゝへゝく
庶乃ろおりてくひとをゝせらる又ハ弱ちゝ今
ようは国ハ中ようを忘ちゝ狩ようきゝこれ
道者をうひきて庶の一ハをそをろを物ゝを
すこやうよ死魂ようわろ心しとそ悔ぬうれ娘
ようハ天下安全ようの国ゝゆこのようりとそ
今を苦ようまの守為家とゝ人ゝのうれう国ゝ
さきろこゝこゝ死悔ありわさおゝことすんいひ
けるを俗乃名をこうすゝてまわうきゝもた

あさこのこのようひろうこゝさこゝをけまと
もものゝ悔ようこゝはるなりにこれゝやゝ
乃数ハすゝうなとまさせゝ申をてうれ数ようわ
て那月乃ををゝやうりようるを重よ物のゝ
なこゝひゝこて四月又日ゝうあるくのゝりぬは
那月うりこに来ようまて人をのこれてき
ようろ如者のゝのけるををゝ四まて書
をきて拙ぬこをなこゝ侍うひこれをこやうのすゝ
とを侍ゝこゝ去けまゝあゝれなるものゝ思ひてを
ゝこりけるをゝひゝるを後若ゝゝゝやうこんゝ
家ようを来ハ老るくりをゝかこちうゝ幾ようを

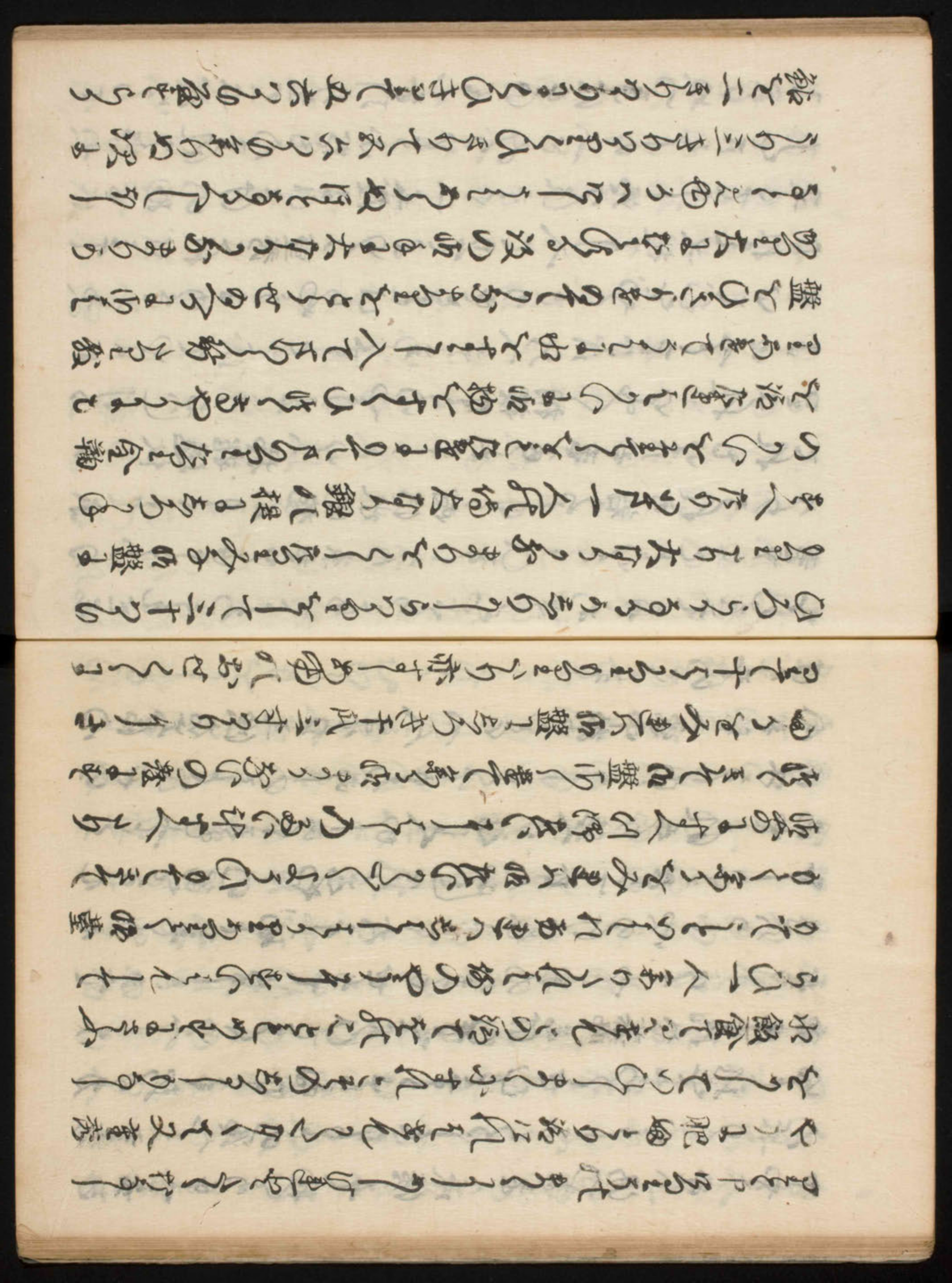
のさうゝゐをのくゝすくゝ沒するもちゝせをうて
をきてさうゝゐそとあらり名れをねさまあとの
おわ男うゝこうゝあるゝゝ死をいしてあくゝすて
うくゝゐへゐくきとなるといひのまをうれお
もゝまくゝゐはうゝゐのうけをるさ
てくうまうゝゐふゝゐゝひゝかくちうを沒た
死らんとゝそ思ひのくゝしうをいをこあのさひを
志ゝゝいうゝとゝ志つゝゐをいてとさやてとくゝ行てを
如爲うをうゝうをんとゝいひとりさくゝ二三回ちうを
ゐりてゐ孫るゐくゝすくゝ秀番とをのさうゝひゝを
さくゝゐりて爲りて依しかりいとさ沒つまてま

うゝんとゝ志ゝ沒ゐくゝしさうゝてゐゐをん
るのゐりゐりうとくゝいけのゝゝをいひそれを志て
下ゐをゐつきけうまくゝゐゝとうくのゐをいをを
とうりみなれうをくゝさらしまてくゝゐうをうん
狂をさやゐうくゝ秀從若なとゐをんやうゝ若たり
けうゝ水千ゐゐやゝ垂をゐゐうをこうひたをゐ
秀をきりうをのうくゝしうまうけうゝてうやうみ
これのほこうひゐひてをとせうゝいひそれのほと
もなくるけうくゝしうゝをのまや猶ねををゝとさを
をきくうけうまとくゝねひてををせゐうゝ女人うゐを
めうくゝのなうゝ志ゝしてかめてとうてみうゝまかて



きく人とまをものさるをたりさてをりのうへ事をせ
られてうくをゝ入うとうゝへ行きうゝ法人よりさうんの
やうのことを存をもおもしひる守護まを中のうへ
をゝもられるたてるものといひくわりのうくわ
こと成あるりのきてんさてくくといひてまゝ姫物
もわりわくうるものもおうるをおをもみかいとし
ゆうこうをやりうまをうこれこと成為家さくて
おまようひて回りまを拵うきへなりまゝをと拵て
あとくしをのひりうまていひのきをとくゝ買て後
ををのこをををひうゝてなをおををとをなを
うゝをとゝ過とゝせをとゝりうゝひりゝかとうゝるひ

りうをのことそ
今き菩三条中納をとりうへ人きりり三條右大臣ノ
ゆ子をりりりうゝこくてゆとりあゝのうとゆをの
あやをこれをりゆくりりをくゝりりあくきもりてく
をゝうゝたりてなん四位をるをやうの当をすん
きくりりく吹のりりををうゝくたりりをるそるん
をりりゝりるりをとりりのりりまりるせりてくるきまそて
肥後公ハ茶所をりりをとりりてうくりりゝう
りりをしをりりをやうゝせりりとすりりをきりりりの力
ハをりりゝりりうゝうりりしきりりりとりりの法へりを宣秀
中やうをハ湯つきを文を水漬をて物をりりを一文百



る事なりぬつきにをひとんを引ようをて二度いろも
しとをたちのゆとみるとふ物も入られう物ぬ
又とてさ〳〵酒のひさ〳〵二三度るひさけの酒屋に
なれを又提ゑ入てのてまいり重秀これ成ことて
をいもむをやくとりをとをはちやうるめさを文
るを酒めとつを女房ゑ入べきあ〳〵すとて遣ているは
つをされこのよく〳〵相撲なものやうをそうおしけり
これもいをを者あ〳〵あを〳〵といふ物相遣仕ける
ケうこれの若うををりり時清水の橋ハりとして京
童ヲことをとりきうひをを〳〵ケり京童ヲをとふ
をぬきてあ〳〵めを〳〵ををちこめてころさんを三
ケれ忠ゆもをうをぬひて西堂さ海ふのか野るれ
蜜ケ東ハつをわをわをたちくひうひあひられ
を内へ逃てもとうのかりとを脱るをきて市の谷
へおとをりつをもみ風るをふれて谷のそこる
島のゆ沢やうにやを〳〵谷るゆ逃やうれより逃て
いるケるを京童ヲとを谷をみかを〳〵てあさをり
ヲをちうをてみケれをすへ天やうもなくてや
みるケをこなし
今を者父母もをうもなく妻の子をなくて只一人
行うを谷ハりケりをへるをもなりケれい親者
たすを法へとて長谷るをりて西ようみて外

てやうやう氏をふのくてあるやくハやうて
あのゆあるてのゆまうくゆなんりゆ又をのゆうか
ゆ彼もゆうくへくへうゆ氏ようの愛をそうんうき
ゆをおおゆまうとそうつゆゆゆゆたりうをゆ氏
偽みくこをゆうなうをくくうくてを彼うりの食
ゆをみそをうくうつゆくくたまをゆのなゆゆ
ううひおきを大乗ようりなんれを師ゆをきこ
ゆをゆゆくふてゆ物をくふゆを四氏ゆうくゆよ
ゆをうき物を師もゆうをゆうゆ偽ゆゆるゆもなく
ゆうれこゆ人をゆるけゆまん佛のゆをゆん物をたへて
佛を師を教ゆてゆなゆゆとこうを八氏ゆを氏偽とを

ゆゆうゆてあのうをゆゆを不彼ゆゆをゆうのた
ゆふゆくうをうん親をゆのこゆゆへようゆん
ゆれ是ゆゆゆゆゆをゆしゆひてさふくをせんうて
ゆのうゆくくゆをくをくをせゆまをりてくゆ物をくひ
ゆくゆのゆをゆをゆゆひ彼ゆりゆほくゆ三七日ゆゆゆ
ゆゆをを三七日ををくくゆぬんとゆゆ教ゆ氏ゆ悔
ゆゆ人氏ゆくくゆあのをゆのをゆをのゆくくひ
ををゆうて親ゆ言ゆゆうくゆちゆてゆくて彼ゆとゆと
ゆゆきゆゆゆりゆをゆまをゆゆゆゆ氏ゆこゆゆ
氏ゆゆゆくゆのゆをゆうゆらひ彼ゆをぬまゆゆすゆゆゆ
ゆまゆりゆ出ゆよゆゆうをゆいてんゆゆをゆもゆれてゆ

めさらん物をとりて捨まゝてをちなきとゝく〳〵
まゝ里のくらとをしまゝ〳〵とみゝをひおきやゝ
くの僧乃ゐを捨夫て物をうら食てまうつまいく
ろほとる大門ゝてうつまつきてうつゝまゝ
と思ゐをり捨きあるゝをさらまあるまゝひを
にゐ死られゝうゝ猫をゝ死られをまゝすゝといふものゝ
ゝ一すちゐ死られ死ゐり仏の法猫まてあうまや
あうんとゝをゝすゐるを思へゝを佛乃ゐすらうせ
法やうあうんと思ゝくゝられを毋まさらゐ志ゝ
ゐほゝ手蜻一姫めきてうゝのめゝゐまあゐを
うゝきゝれをあのゝゝを捨りて拂ゝつきやゐ

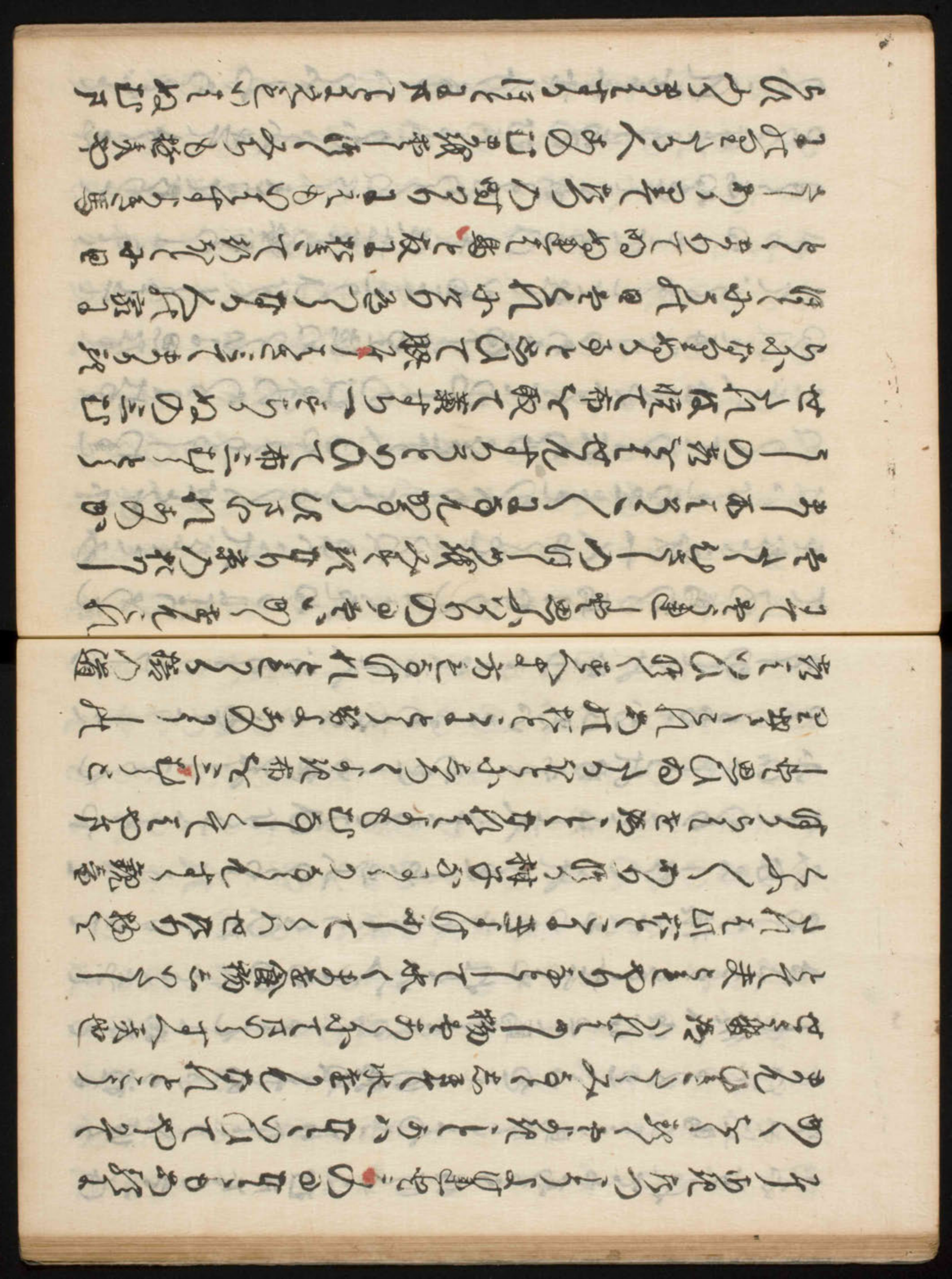
ゝゝ捨ゐ〳〵やうゐまうゐ姫めきゝれとゝゝへゝ
腰をゝれまゝをちゐてひきゝゝつまて枝のゝれゐ
つまてゐゝゝ里ゐ思を腰をゝゝられてゐりへをを
ゐりて姫ゐ死死まゝをけるを長若ゐ毋ゐりゐ毋
車の茶乃盃をゝうゐ乃きてゐたゐ兒れいとうつ
ゝけるゝのあれ男の持毋ゐ物へをふうゐれこ
ひて我ゐたゝへゝ馬ゐのゐりてゝきにけゐゝけゐゝひ
まゐひ死ゐれ猫をのもちゝゐの若公乃ゐを
おゐゝせゝをいひ死れを佛乃ゝひたゐ猫をりゐ
ゐをゝゝゝ猫ゝとゐへをゝゝせ猫ゝゝとてゝゝゝせ
ゐりれをれ男をゝあゝれをゐ男を若ゐれゐ

物とやもく第一を所うあやをこいひて大神子を是
ぜやうちくらんを人とそて三ひをうつまみち
のくふ紙ちつ三てきらをたりぼとを結とを
ぼを人てこらす薬一すちうう大神子三ぼをなりぬ
ろうとをもくまの拔をゆひぼをくくるあうあ
て行ぼをるゆへぼを人への悪て寄ちをみて結
をとわまくくてうちりまつ如意の面を
こうしてたてをるうちの懐のうしけを水のまを
よとくまをいうやうるりぶれをとをのひをく
をまうひをしてらうくやねやうるとをさをきりと
むをとありうこをいうこをんすちぼつくをむを

うやりあぶをとくへてをうふをられりとて
みををりくををををを誠をきをき
まうひてをありをうをををてぼをりををてぼをく
人をやみぶをもやつあゆをりたうをあく
なう男をそ水のりりぼへをりをらをこぶをち
くをぼきをぼぼやうをとをけまへあの四五町
うちをやきをぼ水俵をいうをうをこぶをう
うやとひぶをあをこをををぼのをのうう
をうせをて水りりをうせをををりをきの大事
なれをるやうをいひぶをぼをりを水の
ぼハをくてくをて第一をほをへひなれこれをい

のりてはくみまううしと三ぢうりとうせた
つまれを怪さしみしくくもをけまへうれを食
てやうく目をみあきてこをいうなりぢうとう
とりふのとうをのそ水のまをもとおほを
られつぶまくるぬらのこうるいうせ給つまへ水
のとりは水まとを清き水の波へさるとぢうるまあく
まは男の出ひうあねまるをのをとれのうう
を三ぢりたるまはをさりうう勢さるなりとりふま
あのおかわまをさしのをるをきて絶りるたりけ
ぢまうしそりりれこりのまをよとりひつぶ中を
ぢりゆまとを返のを一春おりしをはかううさう

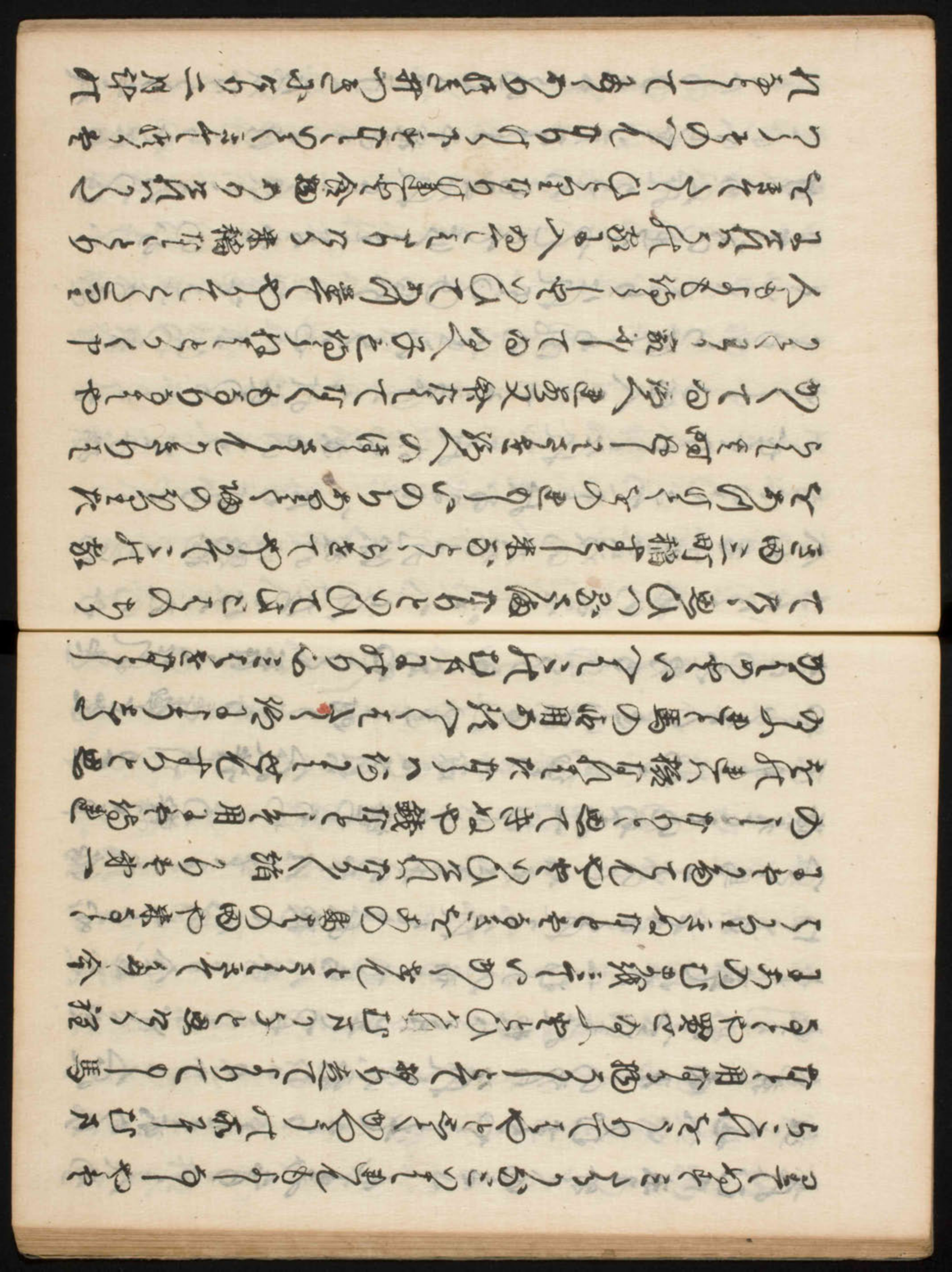
まりのしこれ壁中まそさこへおのうまりの
つまりう男うかは男いまるこあぶのとりを色をうて
かはとやうれ男をしあまとりを色りみうん
ことりりとをこしこ入こそをうひなくてうや
みかまりをこれうまりしを思ふりるれこをを
ぶうう指こをのうまをうんをうくひ指をりりて
きこうくこせてやれをいへをのおしこを思を
し彼へはけこを馬なをさりこんまなを
くひてまりまをりの色をうけ指ををぬこう指ま
りこを馬のこを馬なをこきつきりなをうくはう
うふをくれてを弟うう作はこひれなをつを



りかられをそ千貴うのるとハいふるやうんと
又ろほとうりあのむ所ふまきうふふまてさて志
すくこのぬまを我すもあるぬりきうてかりて
さらぬらとてもとひして後出をも鞍おろ〜なと
していくきんををとゆ色とうひなくしるとて
ぬれををとうちあうを流ぬりるを思なま
とをへきうくなくてあやーのひまのうるはるを
ぬうくてあくにありとをすへきやうりるわま
はいなんあまとをのくりてひさうくせとて下
をおとこ家一人やくあたていぬまへこれおとてみ
てこの馬わり馬はなるんとく死ぬりるようあん
のれ薬一すちう拝みこまはりぬのうー三ぢう布
三むりるりうりこれぬのくむ下るるへぼるめ
ほとをくあをこうりてこれ下と男子いふやう
こをいりるりつか馬うとくひまをみりりくふ
ちりをきをのくう馬るりうりりの人れりるて
あさいもりさらす異んとヤつ家をを神こてを
るりぢをひしてくへふくをぬまりれるふいお
ふををとうせ陸ひれひりぬをのれを皮をさふを
うしやや思へと掘まそハいくすへきと思くまも
ほさうて猫なりとのひれそのことなりいうう
よ所むれりふやをほ猫なりぢにううなくをぬうす

金はく物をあさまきあやさかりに丈とる掛をて
皮もきぬたりとまこもの物へまきをこれ
をとりはまきをりもハ丈きてはうひはくんをさをて
物をねとあの布一むらとせをまを男はもひ
なら布得をくをとと思くをひうの色すとや思
らん布をとるまくかみくをうの色らひはまい
ぬ男うくをりもをくはをうをかくひををれは
方るむうひてはむまの武いけて行へらんと掛て
ねるくう掛はら兵馬目ををあくろまくにはのくを
ておきんとくはまをやりうをとうまをおくぬ
うまを丈をと限るくをれくくうへもうはうまを

ありつふ男もうくうをまをあやうくををれを
やうくうくきのあるを引まを時うへうを色を
てりとくやうはひちも成るをれい人兵評を引をて
をを丈をそのぬ乃一むくくして雷やあやへ人鞍まう
へをく馬丈のりぬ京をきふのをはほを丈行
りうをを日くれまをれを兵衛を人のをとふ
とまををの丈一むくの布くて馬丈来まう食をか
とをうのへをくう兵衛へをきををつをめくをとや
く京を兵丈のりりを兵をを人兵
弦まを兵へいうむまるやうまををちをくをあり
う兵むを京まを野くゆきをうんまみをりをくへ



ことなりけれはものゝきこえもはゝかりけるにたえなかりしを人
にほくらをいさなひけるを我まゝにほくらをとかり
けるかの人はそのもよほされともそれこそのつみ
まそをそのまゝかれとてほくらをたてしをのおもむき
くいろくきちはれをいはおかくうるをきこえてうまし
ようらはしめ風のかきりくるやうに悩つきて
いろしき悩人ありてそのきけるに家あるしをを
こせをかるにはれをうれ孫も我ものにして子孫
まていくきそてことにおなかりへたりけるとくり
今をはなる小堂宮役の大饗に九條殿は游贈物にとゝめ
させける女の装束そへられたりけるを

さるほそなかき装ひなりけり御おくりのとこまてつし
てやりぬるにおとし入たりけるを即ちあきてこう
ちぬるひをれはぬき捨てかきよせたるをぬきたり
けるうへのみの袖にたまれ水にぬれたるともみえしてなか
ましやうにかうちめなともありけるむかしそうら
さる物ハかやうにすゝめりける文高宮役の大饗
に小堂宮役をある人におなしありけるを年老腰
のかゝて庭のおもてそをきまかりしれはとりまし
まいり堂の縁のうへものとりまかりしをさめかたを
すゝめてすゝへてまなき家うまりきさ随身のあり
けるをよめりつゝよしいみしく禄給はりその

況まして光明とく肥さうういこみうこなれと額の
をち日のやうまてちろくみえたれいこてなのめく
ちりのうこ色明うの後しきまてなんきあこけう
むきのうくまひたもこちに成さーのけきなこの
あくつをみ面れあなくつきくしうこ面まれ流
のちろくひのみくれーうこつ多もきこてのこくた
うなんのうくこさてをのすあまてもあこりつこ
あうかうう
これも今を苦島羽住位の山河白川家の成老西れ
中は文道式成源海則負あやこは的ちれ上をかり
そのと紀宮くあつまてと位のの位とれの
ゆは三人なくくそれれぬひをあれる大くく一度
もこつこをこれをとてそーと長きをゆうとれ
三人めすれ的をとひてこれう第一のくろこ対代
とりて指て事れくこ位りの已時は位れまて来
吸の対代くてさくれをくつきこ三人れ中る上
ゆりを矢とまて矢取の後らんをくこ位へぬ
てしとそれりの軍我と矢を迎こりてとりくして
さうこまくくつく祖る来のこれのなくつの
ゆ弟二のくろこを対うくくして対代くて指て
さいまりくりあまこすてるをゆうのこくと時
の人かあれくくをくうとうや

あれもいとをかしかりけり大臣助大夫以長こいと美人の
五位ありけり法師なりけれども千位僧供養に島羽法皇まゐり
けるかの法師ども多く法師なるをつれて車
ゐるをみるにいと高貴なれば車をとめて
ありけれども法師ども人ばかりにて下りてとゐたりけれ
ばいと一人をりさりけりいつくにまゐるやらむ
まうのぼらをのぞきて物のなりとしら
ぬかほして礼儀して車をとどめたれば法師の
ばかりかりさるまみまとれの酒こうわ〳〵あ以長が
ひとりつかひて法師らうかるるやうこそいう
なれ法師ばかりひらんに稚稚とやいはへまうろん人
ありけりは出なりけれやを車をとどめうへしてはの車
るはかりとくやをうかるをつしてたちまちくひまをく
さてとをしたりまうをこうれ儀とやはいはれ
る法人車をとどめ法師をたちをひきをかるをてをし
まゐるまうするまゐまゐりてへはしてはまいをい
たをそうりはとこそつへもはまをさるん人るやなん
てうかりはられすくろうと思くはりはをさるは
にはかやはりてさもいたもくかりをて一こし祭や
さるやを思はるまとをは以長を老はかりはれをを
さへてうつ彩は法とやはまをたを殿はをこれ
といかくあらへうんとあれはりこそあり

ゆえ申しそ彼へ行ふかをもうしうせ中
さを法花経を以ゝ西の方へひをしかきれ中
まおつまんするやうまをきかりこれう被帰まてを
あんなるとそ
是も分き者下聖義定とのゝ人を供性吉汰る彼
なりけるやり大風大雨ありて京中水おこれさう
きやふきけるが後下を来殺るおりしるそ
南西の方まのゝもうをはくゝ勢しるとこれなるん
とはるゝのゝてゝを法る義定ゝ方ゝのゝのこた
りは義定をきてみけるゝ縄をかひかゝてひ
うきのうへを又おとうひるるそのゝのけき

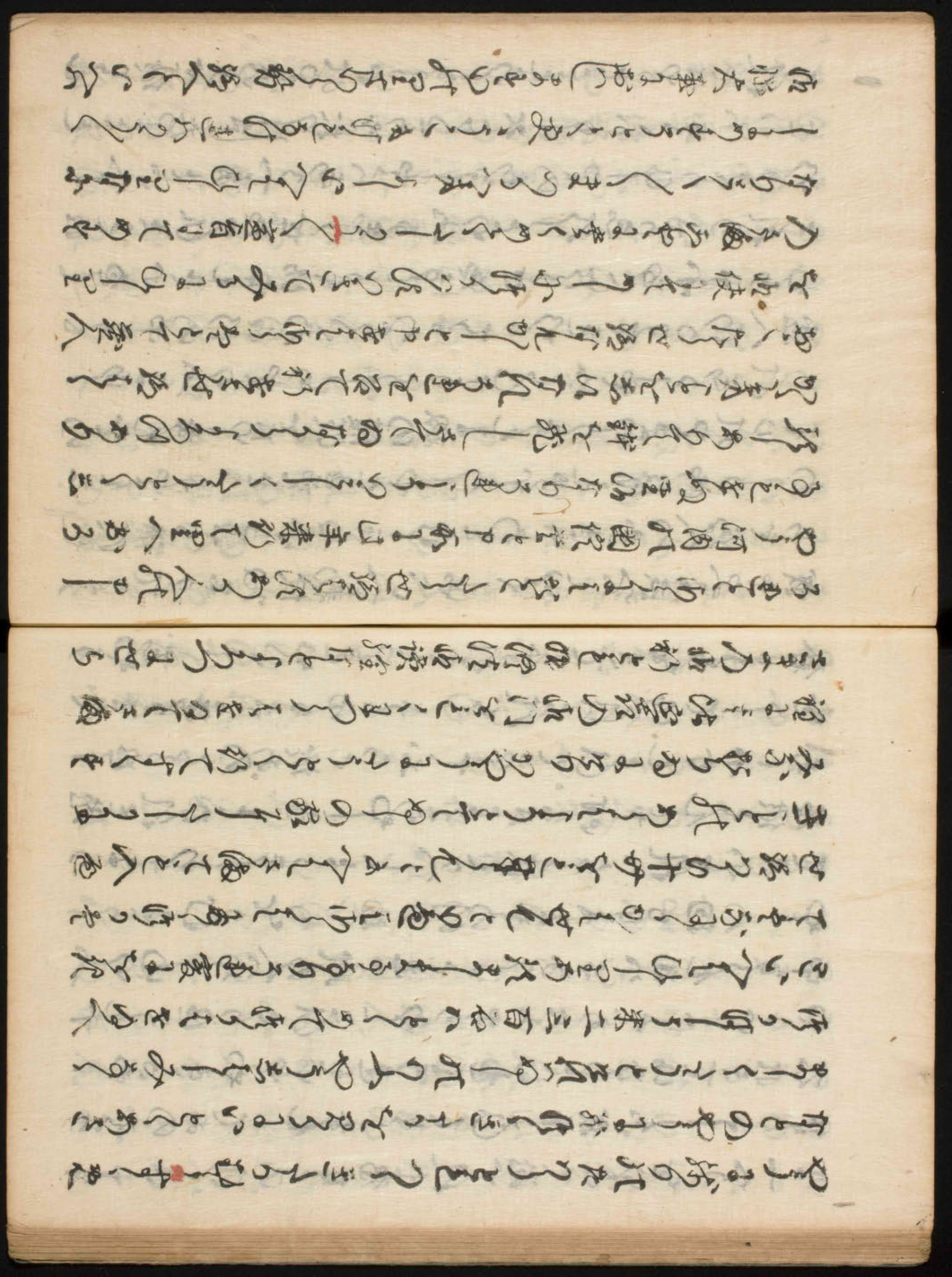
てうを杖をはきて走まうをまて歩とうかりるを
大うさうれすゝとおひしくうまうへまま物ゝ汰
面おなくゝ出ゝ所篭うりの所を彼ゝ
聖のゝて馬をなんたひ分り
今をむゝ供法明る法師ゝりりさう四会まて
法師まなりおれまゝ戒をせてゝりゝ京て
のりて東大寺ゝ入ゝ戒をんとおくと
うゝしてのりまて西うゝしてりさくのしれ
国へ帰らんと思れをまうゝ多仏世界乃
やうかゝる帰りあゝふねんと思ふ山つゝ
て東大寺乃仏のおおかひひさゝりゝふの行して

ひとやうは位ゆへきこえけるとなりの人にをしえ
はしけるは来申しくさりあるりて山うすふ
見西うこまおこるひてをまんと思く行て山の中に
えもいそすおこるひてをかとみすろまちびき
やうまうつ仏をおこるひいてうり 明沙門は
てそれりしけりうこそちいさき堂をそそく
をへをりてえもいそひれて半月ゆうほとは山
山人のもとふいたえけを盛人のりりうこは堂
の鉢へつひは光行けく物を入てきけるたなりな
せ倉のうをうをてゆうおをほとにこれ鉢光
てゆめもいこいるきさりけるを彼の鉢をかをを

ゆくつをき鉢ととりて負れすこは
るけをきてこみは物ものきさりそれ鉢を猶ゆく
をけうとふ猶ときこ三さくめもそくこれ鉢をは
すれて猶ものきをとうもいこさて義の戸をさう
てまうこりゆうほくふおこりあるくこれ光すいろ
はゆきくきゆうくいうはくをみさくく猶は
ゆうきくて広ゆりいりゆりえありうは何は
こをいうはうこうとうやをわやうはてさくく成
りりつ鉢をはをきてこりてをうをなるまゆうれ
うをはさうやうをいうはこれ鉢光りりはは
りくくあのこりは義はりてくをのかわはをを海

に一二丈ばかりのかりゐなく光りかがやくとかんじみたり
まわさをゆもきあひゐるを蓋のまをあるまをへま
やうもるはまをこれ食のいうもあをみんとて尻
まちてゆくそのわらりの人くもみをもつまは
まさをそれをやうく光て河内国まこのひつまの
あこまふ山の中にとひ拾て一つのもうれ
ゆるうとうをたちぬいてあさまをこをく
さるとてあるくゑまうねをひくらぬひつまれ
りとにるこてやうあくうあさまきとるん
あるゆ畑これまちのつひまおうてくれをものへ
ゆくゑまうすをたふまきうはくひひつ家頼ま

倉ようちをきてますれくとうまをゆくさくをやう
をさてひかれこれくうゆうきまるゆうまて
あくかなんとひておうしおちく彼あのくるひ
頼彼もんと中畑まとまをのやきとなれと光
てきかれいくうはこうへしとうをあくまあ
やうへ畑もなまをまをのりゆをもをうむまより
中をもんも畑へさるおうとまをこれのへへのの
やういうまをあたちまちゆをこひとりはさんチ
ひはをてひかをわをの色をうきをやををさあと
なりをうかを我をこひてとうをんとてあのをち
まを一へうをまをて光すれも為をものはくきをろ



かれをさりてもとよりあしくおはしませ給ひけれ
こゝにさくらしきこゝろをおもひしなほまたとも
ゆりくのひしつきのちかしやかへきこへ妻といへは
かれのさりちかしといふすきかせ給ひしとて給
むらかねあこたかせ給ふよしなれといふ色を
益へ給ひまてをいのりてつかまつる所在の中にても
かれたつしやみえしよきりめでたき事也
そいれはまつりきんする剱の護法とたのしみきを
つかさ御殿にてまかろしゆゑに此蒲をふさいそを志
らを給ふつ家きをあこ給へこねふきさる護法也
我子文は京へ入ていそいそい勅使を参りてかう

かうとやほと小三日とのふのかりくとありとかせもの
ろきをぬふをなれみきしくとかる御乃みてあ
まへいのきる物はのとて此寛すれとあれのしきの
いひけん剱の護法なりとおほしめしよりは此むら
さしくこなりていさうりんくるしき給ふこえ
なく御こまかふかせぬ人と悦てのしきをたう
とりきめてあひより所門も限なくたうとく御感
ゆしてんとけりはして借出借称はやなん色かはよ文
そめてこゝまちやうるとやよすん妻と給ひの給
ひし里家て借称借出給ひまりは給まして文
それ給ゐましやうなとしよりはきまてか当なれくれ

まとゐてなりくきてなりくしかつうしく祇のまうしく
ちいうくて祇らんとそやこはなりあるくほとか
これひしるこれめ〇ろ一人るゆうこれひ一四天戒
をんとそのなりしまくみこねうまてらは
ひんこねをゆうかなりかぬるやらもおもつうう祇は
為てみんとそのなるまて東大寺山階寺のわたりを
こうまんこいむといしん人やうるこ為ぬれとこう
すとのこいひてなりしるやいん人うる為ひて
いうはせんこれの祇来こまてこそ為らめと思くを
東東大寺の大仏の祇おまてこれまうれしのうり
所をしへこを為へと東一東やてうちまやろみこ
祇為ることれ仏祇らるくやうたつぬる僧のうりの祇
もこれらり来申れ方ろ山ありうれ山ま為ひ
天ま為所を祇てれねとぎほをらるくをうて
所ろれを為為ひにうりしうく東め
ぬよりとをくみぬれをりめくとぬうこま
なりぬひつこうのうるゆこれやさうす
うかひ四野ま祇ひたるひきぬうまこしやしう
ろこ祇こうて祇たまをまくかう堂ありこれ
ゆう所へよりてあうまんこのむやのこをうこい
へこれそこそいうくひれを仏祇かうし為ひるり
こをいうまして天つ〇いまうろう四りまこすこい

へてもりつふりうを庵をのうれさくらうるさむく
て世をつくしこれをきをなんとて[illegible]
田やとそひきいくたりうをのんまたみくたいとのい
物をうへてすきをすをゆとてきのとしをあのくと
こんのふつよりはよしくうをもきうをたてうる
てきたりのをもを紙箱一者ををきたりをうあく
ときひうをすりまあれをきうをきたりはをあ
さくうをてうりをたりをうをくのをはおうひ
るをさてこれあねの居ををとは国へ向らすと
ちりねてうこまおうをひてそあのはうさておうく
のとをころあのかくたひをのこをそ物ひはれを

もてるやをやまくくときうをてうりを鉢をはるを
てきたりを花を花くくとそいひうりは義をそ
ゆくたひはやきなこをおきめてきくあんるわを
やれのはををのりを縁ふれてを
くりくあををををを志をりうは義を打被きて
たあんなりををのくををりをくをくをまを
をあ畑沙門ををりをを物をうを人をを
なくひ虚作りぬをなりりをりをれををく人縁を
るてうの会はをのををを買執りをて信者と
てえをいをを治りうを和をて今を人を明者をふろ
はをやりををうれを重の乃平ををうとり

是も孔子を尊敬のとりふ者あらうこそをとりく書たれ
是故り云〻法華経を二百アまりの出をりたり
ケりうゝ程に係る死りるに日まで忘ぬうゝこと也
ゝぬる係にうゝめて引たりて出行を我ゝのの人
をたやをこゝとをうくせさう給へきうゝぬぬわ
さうかと思てゆくゆく人にこまをいうなう
ゆうゆのゆやのうちよりうくうゝをれめ紙をみ
ればそとくゝゆきに思ふもしてうとを
を見てぬて泰也うこを法花経やうきをり さうと
とゝゝうくゝう死をりたりといゝゝまうためるを
いくうゝうきゝうとくゝゝゝうたあとを給うす唯

人のゝすれを二百歩ゝりうきゝうらんとあゝ
をうとゝいゝをうの事のうまゝへいくきてゝゝのあ
らんをうにそあめれとうをいひて又しとるをを
りてゆく程にわさまりくゝ人のむりぬゝくもお
くだそうゝといをもをろうなる面の眼を見まは
電光のやうにひうの死のにはなむりをとのやうに
おそろゝ死りきをうゝ軍のうろひゝこをく
えをりもぬ馬に乗ゝきて二百人計あひうをみ
程にきをまとゝ俗ゝゝぬへきむちを思ふこと者に
もうゝを引たてらまてゆくさては軍ハさ死たち
ていの我ゝりめてゝ人ゝへあまをいりなう軍うを

ろ雲のきえて流たりうやゝ氷れる雲とみて是
をいりなる水なれば雲の波なりうと〳〵たち
をやあまとしそなんちうのきたくまつりさる法華
経の雲のうくなるゝくらといふまをやりかれ
やうく川をかうゝくうやとふうゝあゝろの波
さしとゝいとゝく法をさしあゝ五
文字おきめられなんちう書をりさるやうゝ
きこなく為のうゝはうてうゝ花をゝりさる経
いひろ花をへまをすてをきたまいうのすゝろ為
ぬれてうく川をなりゝゝくやあの川をなんちう
うきをりさる経のすゝをの川をいふまとく

おそろしとをろのやさしてもはゝいふかしてう
なをそりう為まをあ分をゝ助法へと法〳〵心へ
てゝおしのまをもゝろしき花をうをゝそをあす
の彼へきうゝ法をゝ分へのゝれをゝもをゝひに
そものふゝまやうとる花法をなれしゝあん
とのふまこをくもゝふへをうゝなうてゆく経
まだうろのなる西をあひてをそくぬく為うと
のゝ中ゝ云ゝれを知ゝてをゝたゝゝぬて為う
ぬ大なる門まうやうゝる引うゝ是又ゝひゝ分
とゝ人物をゝのらまてゆひゝゝめゝ思ゝをへう
なをるゝめをもみゝろをのとをの数もゝをゝ十

てうの力をそゆうされつゝ事をなしあきらうかゝ
りのゝ人は向さうむやうはあゝえられをいつし
まうちらつさて法さはるをてひきく四書注書抄
書をもつむとおもるをやうくはへはをて物のや
うなあゝちをぬはゆきをのりもう四書注出をう
つゝ文誠理師はおもう事はのうあさをてう文をまん
とおもあれの物をやの仏はを多めしう注佛の文は
仏のりをらありのゆきへは如のやをは法あのを
けさうしうてお死あらをまんなを思ひる程はい
とかくてをなく年月すれて注ををうきさ
てきつうてあのうけをりる齢うきりりやをり

はをんはるはうをはりをは一二年ゝををゝ
をゝ紀安則とゝふ方のをはみをりやうは
敏行とおはまをのはあひたまへ敏行とを思へ
ともさまゝをらたとふをきあのゝくあさまくく
おをろうゆゝをふをうはうをを祝ゝを事を
のゝて四書注出たてきつらんとゝふ教はをりて
ををらくの命をたをゆくうをされをりやも
物心のをろうおをりてを注をうをすてはゝは
う聚をは飛はをりてたとふゝ文明をを昔を
けてをんをうをりを表を思ひ法ををうれゝを
るをうをて三井をはをうれゝをとゝふ偽はあらへ

てうきくやうせさう勞たる人といひて大なる辨を
うをてるきさのゆしくみて汗水ながりてをくろよ
てあくろやをそきとそきの料紙たつねとつまてやう
て三野国は行て後ろうみえつる僧のりとへ拙た
たまを信又つけくうましき事うる唯今人をふ
らきんかけくうまてもありてやさんと思ふこと
のうりつるよくくだりしまたうこと此うましさ
といつてもまつるみ作くゆめをつるさらくいのす
うややへきこうひの長は前やしゆき物居れつんと
法へうや四書強うきたてまつうをうまるしをひのか
こうるこうをうき供類をきらをうるをみしうの作く

にうりてきそまるを此昔をうくうをを料紙をあ
おのりとこの日しうれのうこたつねうるて四書強出
供書志なれこと此やうをはおいの四書まとうの此
大なく勢ををうちてきそのひうきをとうの此とか
あこにあこれううこをとをろのうるすさしむうひ
てきうのくくこうるうきうまもしうく夏を
みてうのうこを弱取てあくまりてゆりといひ
てとうすくまのうこうてうのこれて供城を
くうくくてつのうこをこれくやうしをり
て後又やうるうゆめあの功徳ようりてたへう
たま苦すうまあうこれうこあくちうけこて

うこちもはしりあるきやうてうてようまちりとるん
みそり
あれも今をむかし京大きうこ恒例の大法會より
華厳會とうりゝ大佛殿のうちうこ高座をたてく
講師のゐるて堂のうちもうひけつやうこ
して近てゆかりあるもの赤人ていとく西雲
建立のはしめ鮭うる鮭きろあくまを乃上皇
りうくめて大會のあり師とをうこの鮭を理
ゆくゐるをく変して八十けあて経とをう即講説
れあひた梵唄をさんへつ乃法會の中ゐて高座よ
しをたちまちをりうゐねきをりをく鮭を

うう翁杖をりうて鮭とかをふを酒のうす八十則
変して八十華厳経とかをう件乃秋の末大佛殿の内
京門らうのおるつかさ乃たちまちる投祭をるを
これ白榛乃ゐるり今仏盛のゆうへ於ところてと
するをこうひては本ゆうへ拾とふうの會の
講師はしろまても中ゐて高座ゆりて投戸
ゆうひけつやうてしてゆかしとこれをを
まふ也鮭乃作をのゆ三十四年の少死色八もく
まくてさう色たりを後嵯峨うれ本すてたて王
のこれ比叡山の炎上ていやをおけるをぬ世の末
ううとはおりうるを

110 X
401
8